

官報報告

内閣  
大正十年十月十九日  
第七五九

立案 大正十年十月五日  
決裁 大正 年 月 日

宗秩寮總裁



宮内事務官



及以

327

大臣

次官

從四位勳四等寺田勇吉特旨  
叙位ノ件

十月五日  
完

夏  
手紙付

四十一

大正十年十月五日  
臺帳記入十月十日  
官報報告濟

(九大)

宮内省

十一  
十一  
十一

奉  
詔  
叙  
位  
勲  
四  
等  
寺  
田  
勇  
吉  
特  
旨

宮内省

十一月十三日

六言

六言

大正十五年十月三日  
立書

皇  
后  
御  
璽

宮内省



從四位勲四等寺田勇吉特旨

叙位ノ件

右謹テ裁可ヲ仰ク

大正十年十月十三日

内閣總理大臣原敬



内

附

又位 第二三〇號

起案 十年十月十一日

裁可 十年十月十一日

施行 年 月 日

内閣總理大臣

内閣書記官長

内閣書記官

從四位勳四等寺田勇吉ハ別紙又部大臣奏請、通功績顯著ナル者ニ假處目下病氣危篤、趣ニ付特旨叙任、件上奏相成然ルヘシ

内閣

從四位勳四等寺田勇吉

特旨シ以テ位一級被進

從四位勳四等寺田勇吉

叙正四位

329

私立九段精華高等女學校校長從四位勳四等寺田勇吉  
敘正四位

右ハ明治十一年三月大政官八等屬トナリ後統  
計院屬文部省御用掛ヲ經テ明治十七年九月  
東京外國語學校教諭ニ任ゼラレ翌十八年九月  
東京大學豫備門教諭ニ轉ジ同十九年四月第  
一高等中學校教諭ニ任ゼラル、迄主トシテ外國  
語ノ教育ニ膺リ同二十二年十月文部屬ヲ兼任シ  
時ノ文部省會計局長久保田讓ニ隨行シテ歐

文部省

米諸國ヲ視察スルヤ專ラ教育制度、學校  
財政、教員恩給制等、調査ノ任ニ當レリ明治二  
十三年十月第一高等中學校教授ニ任ゼラレ歸  
朝後二月ニシテ文部省參事官ヲ兼任シ學  
生ノ指導ヲ並ニ教育制度ノ整備ニ盡シ同二十  
六年七月文部省參事官兼第一高等學校教  
授トナリ同三十年文部書記官兼文部省參事  
官ニ轉ジ同年十月文部省視學官ヲ兼テ驅  
勉教政ノ振張ヲ計レリ明治三十五年二月高等  
商業學校校長ニ任ゼラレ商業教育ノ發達ニ盡

コト多カリシが同年八月休職ヲ命ゼラレ閑地ニ  
就クヤ或ハ東京市教育會ノ創立ニ參ジ或ハ  
私立日本橋高等女學校創設ニ與リ專心  
教育事業ニ從事セシガ明治三十八年四月ニ至  
リテ自ラ私立精華學校ヲ開設シ翌三十九年  
四月幼稚園ヲ併設シ以テ小學教育及幼児保  
育ニ一新生面ヲ開キ今日ニテ小學校卒業生  
ヲ出スコト四百十八名幼稚園修了者ヲ出スコト  
凡ソ三百餘名ニ達シ同四十四年四月更ニ私立九  
段精華高等女學校ヲ開校シ以テ女子教育

文 部 省

ノ向上ヲ圖リ既ニ卒業生ヲ出スコト百四十二名ニ  
及ブ而シテ傍日本體育會體操學校女子部  
ヲ主<sup>宰</sup>スルコト多年卒業生ヲ出スコト二百九十九  
名内女子師範學校高等女學校教員免許  
ヲ授與セラレタルモノ十四名ニ至リ其成績何レモ  
見ル可キモノヤリ而シテ此ノ間師範學校中學校  
高等女學校學力試驗委員タルコト十餘回、  
文部省所管政府委員タルコト數回其他内  
國博覽會審査官トナリ皆克ク其ノ職責  
ヲ盡シ終始一貫本邦教育ニ貢獻シタル功績

洵ニ顯著ナリトス然ルニ目下重患ニ内惟リ命  
旦夕ニ迫レリ希クハ其ノ功績ヲ表彰セシ頭  
書ノ通位階進叙ノ榮ヲ與ヘラレンコトヲ茲ニ  
謹テ表ス

大正十年十月十二日

文部大臣中橋徳五郎



文  
部  
省

文 部 省

文部省第一五五十一號

一 寺田勇吉位階進叙ノ件  
右 上奏書及進達候也

大正十年十月十二日

文部大臣中橋徳五郎



内閣總理大臣原 敬 殿

裏面白紙





丙  
七十九ノ二

一 従五位上 藤原 朝臣 藤原 朝臣

右特旨ヲ以テ正四位 宣下相成候ニ付位記竝辭

令及回送候條傳達方御取計有之度候也

大正十年十月十三日

宣下相成候ニ付位記竝辭  
藤原朝臣

宮内省

めくれず

裏面白紙

334